啓蒙主義者カンペの言語論におけるロマン主義的変容

——モーリッツとの比較を手がかりに——

山内規嗣

はじめに

十八世紀ドイツ啓蒙主義教育思想を代表する汎愛派は、近年、近代教育学と国民教育思想への批判的視座を求めるという目的にたつ国内外の研究にとって、重要な対象となってきている。そして、これらの研究対象の中心を占めるのは、『教育再検討（Allgemeine Revision）』編集者であり、また教育的児童文学『若きロビンソン』作者であるカンペ（Joachim Heinrich Campe, 1746-1818）の諸著作である。[1] それらの研究は、カンペの教育思想を、汎愛派のみならずドイツ啓蒙主義教育思想の代表的な一体系として捉え直しているが、啓蒙主義的理性がやがてヘーゲルらによる歴史的理性の立場から主知主義的なものとして批判され超克されるという通説に基づいて、カンペとその批判者の間に啓蒙主義と次世代との断絶を見いだすという点では、従来の研究と共通している。

しかし、カンペが『ドイツ語辞典』（一八〇七—一八一一年）の編纂を多様な著作活動の終着点として、一八〇〇年代以降にドイツ語純化運動などを中心とする言語の問題に専念したことは、はたして前時代の遺物としての啓蒙主義者像を単純に指し示すものなのだろうか。彼の言語への関心そのものが、ライプニッツ以来のドイツ啓蒙主義におけるドイツ語ならびに普遍的言語への探究努力を背景にもつことは言うまでもないが、カンペが継承したその努力がロマン主義の到来時に結実したとき、そこには啓蒙主義からその時代的限界を越えて継承されていくべき内容が、当の啓蒙主義との緊張のうちに示されていたのではないだろうか。しかしながら、カンペの辞書編纂に現代的な異言語間コミュニケーション論の先駆を見いだそうとするオルゲルディンガー[2]にせよ、ドイツ啓蒙主義における人間性の理念と絶対主義的社会への迎合との矛盾という図式にカンペの言語論をも適合させるフェルティヒ[3]や逆に市民革命的理念の全面展開を読みとるシーヴェ[4]、またカンペの児童・青少年文学における対話場面に注目するコスト

ラーホルステ[5]にせよ、近年の先行研究におけるカンペの言語論の位置付けは、カンペと同時代のロマン主義者などとの議論を後者から前者への批判としてのみ把握することで、スタティックなカンペ思想ならびにロマン主義・歴史主義との断絶という通説的理解をなおも継承しているのである。

この視点にたって、カンペの言語論を、彼の思想全体の形成過程と思想環境との相互性の中に位置づけようとするとき、そのための手がかりとして注目されねばならないのは、先行研究では自立的著作業の生誕への関心を除いてほとんど視野に入ってこなかったモーリッツ（Karl Philipp Moritz, 1757–1793）との関係である。両者は一七七八年の汎愛学舎を機縁として親交を結び、児童文学集を共同編集したほか、一七八五年にヴォルフェンビュッテル公国の学務官に着任したカンペの「ヴォルフェンビュッテル教育書店」から、モーリッツは英語初学書などを執筆刊行している。また、モーリッツは、自伝的小説『アントン・ライザー』（一七八五—九〇年）をはじめ、カンペとの論争の発端となる美学論や経験心理学に関する雑誌などを数多く執筆・編集し、そして言語論の領域でも『文法学的ドイツ語辞典』（一七九三—一八〇〇年、完成は没後）の編纂を手がけるなど、カンペにおける教育、心理、言語、文学などの広範な関心領域を、彼との関係のなかでそのまま共有していたと言える。しかし、その一方で、先駆的なロマン主義者という後代の評価を待つまでもなく、モーリッツが汎愛派の一員たらんとしたことはなかった。そして、カンペの側でも、その辞典編纂事業の劈頭をなす『ドイツ語翻訳辞典』（一八〇一年）の序文において、すでに亡きモーリッツを「新時代に我々の言語の増築にとりくんだ最良の頭脳」と賞賛しながらも、同時に、モーリッツの言語論に「普通のつながりを持つ表象から異常な表象へと苦もなく飛び移る」という論理的な飛躍を見出し、これを批判している。[6] すなわち、カンペは、自らの言語論を辞典編纂というかたちで具体化するにあたっては、明らかにモーリッツの言語論を意識的に超克しておく必要があったのである。それゆえ、カンペの言語論の目的と思想史的な意味を検討するためには、このモーリッツとの対照が必然的に求められるのであり、このことが本論文の実質的な主題となる。

1　モーリッツの思想と言語論の性質

モーリッツの言語そのものへの関心は、早期から心理学や文学、美学との密接なつながりにおいて存在していた。彼はまず言語を自然所与のものではなく、認識界における任意の記号として理解する。この記号的な言語観に基づいて普遍的

な言語を探究しようとするとき、モーリッツはライプニッツらによるドイツ啓蒙主義的な「普遍言語」への努力をほぼ共有している。そして、言語として用いられる諸記号と、それが指し示す対象との関係についても、それは同様である。例えば、彼は、語の差異の根拠を「事物そのもののうちに」存在すると考えるとともに、言語はその差異を語の相異によって示さねばならないにもかかわらず、「私達が気づいていないその瞬間に、私達の手のなかから再び抜け出そうとする」と述べる。[7] ここで主張されているのは、「表象における創造」のなかに言語そのものがあるということであり、それは静的な言語認識から「思考と言語活動とは相互に影響しあい、歩みを同じくしながら進んでいく」[8]という認識へと変遷した十八世紀的言語論の到達点をひとまず示していると言える。[9] そして、このような言語論に基づいて、学問的教授の前段階として『子どもの論理学（Kinderlogik）』を執筆したモーリッツの努力は、カンペが「先概念」教授のために『子どものための小心理学』を著した努力と、関心の対象については一致している。しかしながら、ここで問題となるのは、両者の方法論的基底の相違である。つまり、カンペがその著作において目指したのは、心理学的「先概念」の教授を通じて子どもが自己を能力心理学的な構造のもとにとらえ、この自己理解に基づいて衝動を理性的に抑制可能であるということだった。これに対して、モーリッツの場合には、そのような概念教授の限界こそが、言語論において示されているのである。「私達の思考は制限されているので、ある表象をとらえようとするときには別のものが消え去ってしまうし、ある表象を明晰なものにしようとすれば別のものを不明晰にしてしまう」。[10] 人間言語のこの限界は人間の思考能力の限界にも由来するものであったが、彼がその限界を越えようとするときに手がかりとするのも、また思考能力を含む人間の心的能力だったのである。

彼の言語心理学的な把握にしたがえば、人間は「洞察力」と「機知」の作用を通じて言語と心的能力そのものを拡張し、この拡張に寄与するのがいわゆる「天才（Genie）」である。バウムガルテンらの美学に由来するこの理解をもとに、モーリッツはさらにその天才が働く対象を指し示す。それは一方では古典古代という外在的な対象であり、『神話論』（1791）では古代の神話を象徴体系としての「空想の言語（Sprache der Phantasie）」と位置づけられた。[11] 彼にとって神話解釈とは、古代人がそこに構想した理想的人間像を詩的・美的に直観することにほかならない。[12] しかし、そのような神話世界の直観がすでに困難となりつつある時代に、モーリッツがもう

一方で見いだす対象は、内在的なそれ、すなわち自分自身であり、この着目こそが彼を特徴づけるものであった。『アントン・ライザー』の中で、モーリッツは、「言語は彼にとって、思考の邪魔になるように思えた。しかし、やはり、彼は言語なしに思考することはできなかった」[13]と回顧する。この限界に、自己形成過程への反省的な遡及を通じて向き合うことで、モーリッツは、そこに言語と思考の限界を踏み越える契機を見いだそうとする。「私が判断し主張する対象となるものは、私が判断し主張する根拠となるものよりも、つねにより個性的であり、より普遍的でないに違いない」[14]と述べるとき、彼が意図していたのは、その判断と主張の根拠を自己の内面から分析的に探り出すことで、より普遍的な概念とそれを指示する言語とを発見しようとすることだった。このように、モーリッツの言語論は自己分析による普遍言語創造のための方法論を包摂しており、これを適用しようとしたのが彼の文学作品であった。

しかしながら、モーリッツの文学作品は、彼が崇拝したジャン・パウルによって「詩的生活を形成することができなかった」[15]と批判されているように、幼少期以来の心的抑圧を直視し超克しようとしつつも、ついにそこからは解放されることはなかった。それは、「経験」心理学の基礎となる自己省察が対自的な「経験」の認識たりえないということにも由来していた。[16]そして同時に、彼の言語論が目指した普遍言語への探求もまた、「天才」でありえない自己の限界の前に、必然的に阻止されたのであった。

2 モーリッツ-カンペ論争の心理学的・言語論的基底

以上のようにモーリッツの思想総体をふまえた言語論の特性をみたとき、カンペの言語論はいかなる姿をとって立ち現れるだろうか。その検討の手がかりとなるべきカンペとモーリッツとの論争的な関係のありようは、言語論におけるそれにわずかに先だって、出版契約違反という別の問題をめぐり、しかもはるかに激烈な表現をもって公衆の前に示されていた。激動の一七八九年の前半五ヶ月にわたるこの論争は、例えば十八世紀ドイツの文芸的公共性の成立過程における著作者ならびにその思想・作品の自律性と市場経済的な必要性に基づく出版者の干渉との対立という図式で理解されており、[17]言語論とは無関係な印象を与えている。しかし、この論争の中にこそ、両者の言語論を含む思想総体を対比するための鍵が存在しているのである。

この論争の経緯を要約すると、以下のようになる。一七八六

年から翌々年にかけてのイタリア旅行中、モーリッツは出版者カンペに、すでに口頭で出版契約済みだった『美の造形的模倣について』の草稿の一部を送付した。これに対してカンペは、一七八八年八月の書簡では肯定的な評価を示していたにもかかわらず、十二月の書簡ではその「風変わりな空想的(phantasirend)哲学」の出版を拒絶した。読者を選ぶ内容の草稿を読んで出版者としての損害を懸念し始めていたカンペは、モーリッツの不誠実な執筆態度にも不満を抱き、この美学的著作ではなく相応の販売数を期待できる文法書を執筆するよう要求したのである。モーリッツはこれを著作者の自由に対する重大な干渉と受け止め、一七八九年五月イエナの『一般文芸新聞の週間広告雑誌』の中でカンペを非難する「公開書簡」を発表した。カンペの迅速な反応は、同月の『モーリッツ、あるいは経験心理学(Erfahrungsseelenkunde)への心ならずも悲しい寄与』として示された。この反対論述に対するモーリッツの弁明が七月の『学務官カンペ氏の文書について、そして著作者と書籍商の権利について』であり、最後にカンペは八月の『ブラウンシュヴァイク雑誌』の巻末で論争を終わらせる簡潔な一文を残した。

この論争でモーリッツがまず問題視したのは、出版者による著作者の自由への侵害だったが、これは同時に出版者カンペの啓蒙主義的性格に対するロマン主義者モーリッツの批判でもあった。「カンペ氏のこの考え方は、美と高貴なるものについての真の原則や、精神を厳かに捉える古代研究、直接的に役立たないものの一切、とりわけ彼にとって役立たない一切のものを、排除してしまうのだ。これが私の著作や私の原則にも向けられるがゆえに、遅かれ早かれ私と彼は袂を分かたざるを得ない。お互いの考えが相容れない以上、彼は私のものを空想(Phantasie)の領域へと追放しようとするのである」[18]。有用性を判断基準とする啓蒙主義者カンペの問題点を、モーリッツはここで的確に指摘している。しかし、ここで彼が「空想」という語を、神話を「空想(Phantasie)の言語」と呼んだときと同じく、固有の意味において用いていることには注意しなければならない。モーリッツにとってそれは、カンペが彼の著作を「空想的」と呼んださいに含意させた非現実的な虚構ということ以上の意味を有していた。貧困で抑圧的な家庭環境に生まれ育ったモーリッツは、それに由来する劣等感や脚部疾患などによるきわめて内向的かつ神経過敏な性格形成を余儀なくされた。その成長過程のなかで、彼は、非常に繊細な自尊心とともに、読書を通じてまさに「空想的な世界」[19]を自己の内面に構築するのだが、その空想をやがて自伝的小説『アントン・ライザー』にて自己分析してい

く。「彼の空想がしばしば描きだすすべてのまやかしの情景」の基礎となる表象[20]とは、幼少期の経験に基づいてその「まやかし」を強迫的に反復する自分自身の心を、モーリッツがすでに対象化しえていることを示す。「空想」とは彼の場合、そのような心的外傷などに基づくひとつの心理学的帰結なのであり、彼の「経験心理学」とはその事例の集成にほかならない。つまり彼は、自分の草稿をカンペが「空想的」と読んだことに対して、それが客観的な評価でないことはもちろん、啓蒙主義一般の問題ですらなく、カンペ自身の何らかの個人的経験に由来する偏向や屈折、有用的でないものへの不安などを暗示するものではないかということを、ここで指摘しているのである。モーリッツにとってカンペの態度は、自律的な美学の構築という著作目的を阻害するものであると同時に、自己の内面分析によって自律的人間への手がかりを得ようとするモーリッツの経験心理学の努力にも反するものだった。

このような批判の要点を、カンペは論争相手の性格的な問題点とともに鋭く察知していた。それゆえ、彼の反対論述に掲げられた「経験心理学への心ならずも悲しい寄与」という副題は、モーリッツの経験心理学に対する上辺だけの「皮肉[21]」にとどまるものでもなかった。カンペの批判は、何よりも、「モーリッツ氏の他の著作と同様に、多くの空想的なもの（Phantasirend）がそこにある」ことに向けられる。カンペによれば、一般読者も気づいているように、「この著作者の特異な風変わりさの一つ」は「彼が哲学的に論究するときに抽象能力と空想（Phantasie）がいつも同時に働く」ことにある。その抽象能力とは、「彼固有の観念世界で、すなわちとくに『存在』『破壊』『形成』『死』『生』といったお気に入りの抽象概念についての領域」に「飛翔」するものであり、そして空想とは、「彼によってまたも安易に具体的な質量を与えられしばしば擬人化された抽象とともに、現実の事物に対するのと同様に、心ゆくまで戯れさせる」ものでしかない。「このような彼独特の哲学方法について、私は『空想的（phantasirend）』という以上に的確な表現を知らないのだが、モーリッツ氏はその公的書簡のなかで、私には馴染みの独特の誠実さに基づいて、この語を『想像力に満ちた（phantastisch）』に置き換えてしまっているのである[22]」。

ここでカンペは、モーリッツの抽象能力と空想という心的能力を取り上げ、その作用の関係性を分析している。このときカンペが依拠しているヴォルフ的心理学の能力観は、かつて『子どものための小心理学』（1780）において、現実世界と自己自身の改革に有用な想像力（Einbildungskraft）と、そのような有用性を持たないたんなる妄念としての空

想（Phantasie）という、対象の現実性のみならず社会性・道徳性の基準において峻別する概念規定によってすでに教授内容化されていた。[23] そして、この概念規定に則って、カンペは、彼の心理的偏向を指摘するモーリッツの批判に対して、モーリッツの著作の空想的性格を再確認するとともに、モーリッツの自著への評価とそれを支える彼の自己認識こそがまさに空想的であるという、いっそう厳しい指摘を行うことになった。つまり、カンペは、『子どものための小心理学』では子どもに心の諸能力とその連関を理解させることで道徳的な自己認識を形成させようとしていたが、ここではモーリッツに対して、「空想」と「想像力」の概念規定をモーリッツが混同していると分析したうえで、モーリッツの感性的認識を理性的認識と均衡させ、誤れる自己認識と品性（「道徳的プロテウス」[24]）を解体させ再構成させるという独特のSeelenlehre（心理学、心の導き）の実践を試みているのである。心理学的な事例としてはモーリッツの「経験心理学」の対象になりうるはずのこの論争は、じつはカンペの心理学による「経験心理学」批判でもあった。

このようにして、両者ともに自己の内面を探求し理解する過程を通じて近代的個人の知的道徳的形成の原理を構想しようとしていたにもかかわらず、その帰結は相反するところとなる。その原因は心理学の相違を越えて、さらにその背景にある両者の人格形成過程に見出せる。モーリッツが貧困と脚病と敬虔主義の抑圧のもとで人生の挫折を繰り返し、神の恩寵を否定的な作用として理解したのに対して、[25] カンペは同じく貧困と眼病と敬虔主義の影響下にありながら、挫折の前半生のうちになお「神の摂理」を信じることができた。だが、そこで問題となるのは、幼少期の経験の影響そのものではなく、そのような個人的背景に基づく両者の心理学的な論争を前にして、カンペ自身がその解釈の正当性を示そうとするときに、彼が信じる「神の摂理」が実現する場であるはずの市民社会を、そしてそれを構成する読者公衆を、公正な裁定者の地位に就かせていることである。「公衆（Publicum）が裁く」[26] とカンペが断言するとき、彼は、啓蒙主義的な編著者・出版者としての実績に基づく自負を示している。カンペにとって出版事業とは社会的責任をともなった啓蒙活動そのものであり、彼が判断を委ねる公衆とは、カンペもその著作や出版事業を通じて形成を促進してきたはずの市民階層なのである。そして、彼の教育書出版事業が一七八五年以来の学務官としての教育改革実践と結びついており、しかし教会の反発によってその改革が一七八九年にはほぼ頓挫していたことをふまえれば、カンペが今回の論争で公衆に呼びかけたこと

は、その啓蒙主義的な市民階層による改革支援を希求していた彼の心理をよく物語っている。モーリッツが反論の表題にあえて「学務官カンペ氏」と掲げたのは、著作者に対する出版者の権力性を揶揄的に強調するためのものと考えられるが、これに対するカンペの回答は、「空想」をめぐる彼の判断の正当性は地位ではなく公衆が保証するだろうというものだったのである。

しかし、モーリッツもまた当初より「公開書簡」というかたちで読者公衆の支持を期待した論争を試みている状況下で、はたして公衆の判断はカンペの予想するものとなるのだろうか。一七八〇年にカンペが啓蒙雑誌のなかで魂の不滅性についての証明を試みたさい、匿名読者からの反論が多数寄せられ、論争の決着がつかないままにカンペの側から手を引いていた経緯がある。今回の論争は彼の言うようにたんに「事実」を争うものだとしても、モーリッツが依拠する主観的な心理学に基づく自己認識ならびに他者言説解釈の問題は、自律的美学を支える「天才の自己立法」と同様、公衆の判断とその形成過程を、カンペから見ればきわめて恣意的なものに変質させてしまう危険性をもっていた。実際には、両者のこの論争は、直後にカンペがフランス革命の目撃者となるためにパリへ赴いた時点で、民衆の注意がこの歴史的大事件へと収斂してしまうことで、読者公衆からの何の反応もないまま「ドイツ的な諍い」としてまた忘れられていった。[27] しかし、カンペ自身にとってもそれは忘却の対象だったのだろうか。パリを目の前にして「偉大な驚くべきこの舞台が、私の空想(Phantasie)の産物でも夢でもなく、事実であるとは」[28]と述べた第一印象が、たちまち「荒れ狂う自由国家」に対する危機意識へと転換していくとき、[29] そこには社会統合を担うべき公衆への期待が自らの空想であることへの不安が明らかに介在していた。彼の児童文学作品における子どもへの概念教授の努力は、この段階において、概念形成の基盤となる言語そのものを再構成することによって、モーリッツやフランス国民の激情に欠落していた理性的認識と感性的認識の調和を言語の水準であらかじめ準備しようとする試みへと、必然的に展開されねばならかなったのである。

3　カンペの啓蒙主義的言語論とその変容

それでは、このような問題意識を獲得したカンペは、すでにその関心の中心を占めていた社会統合に対して、言語論を焦点としていかなる具体的解決を図ろうとしたのだろうか。

その端緒は、パリから帰還した直後に刊行された『ドイツ語純化の試みの若干の見本』(一七九〇年)のなかに見いだ

すことができる。この著作の主題であるドイツ語純化とは、カンペにとって、言語を媒介とした啓蒙、すなわち「性格形成（Charakterbildung）」と「精神の拡張（Geistesausdehnung）」[30]の前提条件である。フランス革命以前より続く外来語によるドイツ語の豊富化という傾向に対して、カンペは十八世紀の「国語協会」による批判を踏襲している[31]。言語とVolkの精神、性格、文化、認識能力、知識量などの独自性との間に多様な依存関係が存在していると述べるとき、このVolkは「民族」というよりも、公衆（Publicum）に先導されつつこれを包摂する「民衆」という啓蒙主義的な含意が与えられている[32]。同様に、近代語の中でもとりわけドイツ語が、古代ギリシャ語を模範として自ら研鑽し文化的な進歩を達成する可能性とを持っているとカンペが語るのも、例えばフィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』で主張したような「原・言語（Ursprache）」としてのドイツ語の本質的特殊性によるものではなく、複数の語を結合させて新語を作り出すという「結婚能力」によって「現実的に語彙の無制限の増加というものへの無数の芽」を有しているという、ドイツ語の機能的特殊性によるものでしかない[33]。しかし、それは、カンペの言語への関心からすれば、ドイツ語こそが彼の要求する概念形成の可能性を最大限に有する言語であるということになる。そして、その可能性を損なう外来語の流入は、ドイツ語への翻訳を通じて、その可能性に寄与するものへと変換されねばならない。その具体的な対象としてカンペが選んだのは、例えばrévolutionという語そのものに代表されるような目下の革命に関するフランス語であり、彼が言う「精神の拡張」は、一面において明らかにこの同時代の事件によって方向付けられている[34]。その一方で、カンペがこの言語純化の必須の手段としているのは、ドイツの文芸における詩的新語の収集である[35]。このようなドイツ語のいわば内在的改良と、フランス革命を外在的媒介とする改良とが相互に関連づけられないままドイツ語純化が試みられるという点に、カンペの言語論の理論的な脆弱性があるのだが、それは明らかに、言語論の実践的・論争的性格に由来するものだった。「この試みは多くの人の手に渡り、専門的知識のある審判者によって検査され、判断されるだろう[36]」というカンペの期待は、彼の提起した問題と方策を啓蒙主義的な言論空間においてより精緻な言語論へと発展させながら、その議論のなかで用いられるべき新たな概念の形成を通じてドイツ語を純化していくという、二重の期待であった。この意味において、カンペがこの言語論で素描したドイツ語の純化とは、啓蒙の前提であるとともに、またその過程そのものでもあった。

『ドイツ語純化の二つの試み』（一七九二年）はカンペがその期待を具体化しようとした端緒となる著作であるが、その論争的性格と公共性構築への欲求は、前作に対する少数読者からの批判を「公衆の（öffentlich）判断」として理解し対処しようとするカンペの努力のうちに示される。[37] とくに、『一般ドイツ文芸誌』の批評家から異論を提示された、ドイツ語の豊富化の源泉としての逐語的翻訳の価値を再び強調するために、カンペが付論を設けたのは、ドイツ語の機能的特性に対する彼の啓蒙主義的なこだわりによる。[38] また、カンペが求めるドイツ語の詩的新語についてはレッシングやヴィーランドらの著作がその引用対象となっており、ここにも啓蒙主義への偏位が強く看取される。

さらに、『ドイツ語の純化と豊富化について』（一七九四年）、副題に「プロイセン王国ベルリン学者協会による賞金を授与された」とあるこの「懸賞論文」で、カンペは「言語純化事業」が「普遍的な民衆教育（allgemeine Volksausbildung）」と「民衆啓蒙（Volksaufklärung）」に対して有する緊密で必要不可欠な関係をあらためて強調している。[39] そのドイツ語純化のために取り入れた「最新の諸研究の成果」のひとつとして、カンペはモーリッツの名を挙げているのである。ただし、その肯定的な位置づけには、他の言語研究者に対するよりも大きな留保が付されている。カンペはここで「言語のための民衆（Volk）ではなく、民衆のための言語」であると主張したのである。[40] モーリッツ編纂の『文法学的ドイツ語辞典』は、彼が三六歳の若さで没した一七九三年に第一巻が発行されてのち、共同編纂者の手で後継されていくのだが、そこでの言語は文法的体系性の構築を第一とすることで、民衆の言語としての現実の言語法や方言の多様性を消極的にとらえていた。それはまた、ヘルダーの『言語起源論』に示される「言語のための組織」[41]としての人間本性の理解を継承しつつ、モーリッツ自身が構想するような美学と密接な関係にある記号論的な言語体系への関心によって支えられていた。これに対してカンペは、例えば、しばしば彼と比較される先駆的な辞典編纂者アーデルングがかつて『ドイツ語の文体』（一七八五年）[42]にて主張していた言語慣用概念の「無制限の支配力」を否定することで、やはり「一定しない」文法の統一性や規則性の確立を必要視しながらも、[43] その一方で多様な語法や方言をさらに積極的にとりこみ、日常生活における言語のありようを明確に主題化しようとするのである。そのさいに「書物語と日常語」を区別しようとするカンペの方針は、[44] 教養階層としての読者公衆と非教養階層としての民衆とをなお分かつものであり、彼が批判した通俗哲学者ガルヴェのエリート主義

的な言語論[45]とも、そしてロマン主義の大衆批判とも、じつは親近していた[46]。また、先行著作と同様にこの論文でも、カンペが語源的探求などへと向かうことはなく、外来語の受容史への関心のみが色濃く見出されるばかりではあった。しかし、モーリッツへの対抗を通じて、カンペが、民衆を啓蒙の対象としてのみならず、言語の主体的な担い手としてとらえる視点をわずかながらでも獲得していたという、この点こそが重要である。

そして、もはや市民政府とはまったく逆の独裁国家となったナポレオン体制下のフランスによってドイツが占領された最中にカンペが刊行した『ドイツ語辞典』は、その直前のフィヒテによる講演とあたかも軌を一にした主張を掲げている。その第一巻の序文末尾において、カンペは、ドイツ語を「未だ国民的（völkerschaftlich）に私達を結びつけている最後の絆」と呼び、外圧のもとで「来るべき自立的国民への再統一の可能性」の手がかりをそこに見いだそうとするのである[47]。そこで用いられているVölkerschaftという概念は、フィヒテのNationとは異なり、一般民衆や諸民族集団の集合体を指し示すにすぎない[48]。しかし、彼が同時に「民族精神（Volksgeist）」を維持促進することを辞典編纂の目的として掲げるとき、そのVolkの具体的内実は、ロマン主義のそれへと近似していく。実際に、カンペは、Volkの項目を叙述するにあたり、その冒頭にフリードリヒ・シュレーゲルの詩の「民族（Volk）の木々は大地から、弱々しい芽とともに伸びゆく」という一節を引用しているのである。フランス革命への危機意識とドイツ被占領を通じて、カンペは、「傷ついた国民的感受性[49]」の所産としてのドイツロマン主義、そしてその危機意識と民衆への期待を共有していた。

しかし、初期ロマン主義の代表的思想家であるこのシュレーゲルが、『インド人の言語と英知について』（一八〇八年）において示しているような言語における神話的なものへの注目は[50]、かつてモーリッツが『神話論』で先駆的に提起していたものだった。ここでカンペは、彼が批判し続けてきたモーリッツの言語論に、その後継者であるドイツロマン主義思想を媒介として再び相対することとなる。その具体的な結果は、例えば序論においてもはやモーリッツの名が先行者や批判対象として挙げられず、概念の使用実例にモーリッツの著作からの引用がほとんど見られないことなどによって、間接的・消極的なかたちで示されているとも考えられる。しかし、そうであればこそ、モーリッツの名があえて明記され批判されるとき、カンペの問題意識の所在はいっそう鮮明に立ち現れる。注目すべきその箇所の一つは、やはり「空想」に

関する叙述だった。FantasirenないしPhantasirenについての説明において、まずカンペは、「幻影を見る」「架空のものや架空の情景を形作る」という第一の語義と、「病気」にかかわる「とりとめのないことを言う、訳の分からないことを言う、常軌を逸している」といった第二の語義とを並列させる。これに続いて彼は、第二の語義において訳語となるfaseln（とりとめのないことを言う）という語についての補足説明を行うのだが、そこでは、モーリッツの辞典におけるこの語についての叙述が否定的に引用されるのである。「もしも病気の猛威がその人の精神を一時的にそのような［とりとめのないことを言う］状態に導いているのであれば、その病人は蔑まれずにすむ。しかし、もしも人がそのような病態に自分から進んで陥ったのであれば、その愚か者は蔑まれる」。モーリッツによるこの説明では、病的言動の原因を対象内在的に探り出そうとすることで、行為の意思主体になりえない病人をその病的言動から免責している。これに対してカンペは、モーリッツの指摘に妥当性を認めながらも、「私自身の感覚を信用してよければ、むしろ次のように言うのがごく普通のことだろう。つまり、父がとりとめのないことを言うときに、私の病める父は『おかしなことを言う』、あるいは、父は『常軌を逸している』と表現するのである」と述べて、病的言動そのものについての判断が行為者の心理状態とは無関係になされるべきであるという批判を行っているのである。[51]

ここに見いだされるのは、語の用法についての穿鑿ではない。むしろ、カンペが民衆の一般的な言語用法の水準に依拠することによって、経験心理学と連関したモーリッツの言語論を再び排除しようとする姿勢がここに把握できるということである。その姿勢は、モーリッツの没後二十年を迎える一八一〇年代においてもなお、「空想」という一語へとカンペを結びつけていたほどの強迫性を有していた。しかも、批判的姿勢をそこまで一貫させながらも、カンペは、シュレーゲルをはじめとする多くの非啓蒙主義的な著作家による語の使用実例を収集することで、かえって自らの想定とは質的に異なるドイツ語の「豊富化」を果たしてしまうことになった。[52]言語を対象とする公共的な議論の場を構築しつつ、そこから言語拡張の契機をも獲得しようとするカンペの啓蒙主義的な言語論の構想は、辞典刊行とその編纂過程において、たしかにそれらの目的を達成はした。しかし、その内実は、モーリッツの言語論に対する批判的な叙述を通してその叙述自体を辞典に組み込んでいったように、あらゆる語義や用法を収集することによって、逆に非啓蒙主義的な性格をも同時に獲得していくものだった。ジャン・パウルはその『美学入門』

（一八〇四年）の中でカンペのドイツ語純化への努力をとりあげ、概念規定を徹底しようとすることが合目的的・功利的でないことを、「コスモポリタン的」視点から批判している。[54] 汎愛派のカンペがその言語論においてすでに啓蒙主義的な立脚点を逸脱してしまっているというこの転倒は、すでに見てきたように、カンペが啓蒙主義的な言語論を固持しようとする努力によって図らずも結果したのである。

おわりに

自らの言語論が過渡的なものにすぎないことを、カンペは辞典刊行のさいにも繰り返し述べている。その著作が「より綿密な研究を招来してくれること」を彼が望むとき、辞典編纂そのものと言語をめぐる議論の場の構築とによって社会全体の啓蒙を目指すというカンペの啓蒙主義的な姿勢は、最晩年に至るまでとりあえず貫かれていた。また、カンペが先概念の教授と同様、すべての語をアナロジーに基づいて連関させようとしたとき、やはり彼はライプニッツ以来の「表出」としての言語論の系譜に属していた。[54] そこでは、言語は、完全者の「窓」としての「表象力」そのものである個体において、その個体としての心（Seele）を相互に結びけ、完全性の追求を可能とさせる媒体（media）なのであった。児童文学作品における概念教授と、辞典編纂による概念規定とは、カンペの思想全体を貫くこの啓蒙主義的性格において結びついている。そして、ロマン主義を経た十九世紀中葉に、グリム兄弟がカンペの辞典を「あらゆる語源学を拒絶する」「分別のない純粋主義」に基づいた非学問的で安易な「膨張」にすぎないと否定的に論じるとき、[55] それは、カンペが望んだような言語をめぐる議論と啓蒙の場において、カンペ自身の終生の著作を直接の対象として、啓蒙主義の終焉があらためて通告されたということを意味している。

しかし、本論で示したように、カンペのこのような言語論への努力は、同時に、反啓蒙主義的な潮流に対抗しながらも結果的にロマン主義的性格をも意図せず包摂するという過程を意味していた。グリムの批判は、カンペが残したそのような構成物の中から、国民的・歴史的な視点によるドイツ語の体系性を引き出していくという作業への宣言をも意味しており、この点でグリムはカンペの努力を継受しているのである。すなわち、辞典編纂に結実するカンペの言語論は、語源的な関心を示さないことによって、言語が、その言語の形成され使用される空間ならびにその媒体を用いて関係を結ぶ人間とともに創出される過程を、すなわちロマン主義的な言語起源論の主題そのものを、かえって言語論形成過程総体において

具現してしまうという結果をもたらすこととなる。そして、このようにとらえたとき、若き日のカンペが家庭教師を務め、革命下のパリにも同伴したW・v・フンボルトが、やがてその言語論のなかで「人間はもっぱら言語によってのみ人間である。しかし、言語を発明するためには、人間はすでに人間であらねばならないであろう」[56]と述べるとき、言語と人間との起源におけるこの循環は、言語に対するカンペの努力のうちに、意図と結果の矛盾をも含めてすでに具体化されていたのである。

以上のようなカンペの言語論の特質を特定の時点において特定の視点から捉えれば、啓蒙主義的・世界市民主義的あるいは歴史主義的・国民的、市民革命的あるいは反動的といった近代的学問における対立軸の両端に合致するカンペ像が得られることになる。先行研究が言語論以外の領域においても示してきたそれらの多様な解釈に基づくスタティックなカンペ教育思想の理解は、本論が明らかにしてきたような言語論における変容を基盤におくことで、一つの動的な像へと収束する。そして、ここにおいて、十九世紀ドイツの国民教育思想が啓蒙主義教育思想をどのように批判的に継承していったか、その思想連関を再検討するための視点が、啓蒙主義とロマン主義・歴史主義の狭間を媒介するカンペの存在によって獲得される。「ドイツ運動」（ヘルマン・ノール）が提唱した「生成」や「個体性」といった諸理念は、啓蒙主義の黄昏を担った老カンペその人の思想的変容のうちに懐胎していたのである。

註

(1) 例えば近代的な教育概念の成立過程を批判的に検討する立場から『教育再検討』におけるルソー受容の問題を扱う研究では、Wothge, R, Der Kommentar zu Rousseaus „Emile“ in Campes Revisionswerk. In: Wissenschaftliche Zeitschrift der Martin-Luther Universität, Halle-Wittenberg, Gesamtsprachwissenschaftliche Reihe, 1955, 4.2., S.249-264. をはじめとして、カンペの『エミール』注釈はつねに汎愛派の典型的言説として位置づけられていた。さらに Herrmann, U., “Die Bildung des Bürgers”. Die Formierung der bürgerlichen Gesellschaft und die Gebildeten im 18. Jahrhundert, Weinheim/Basel, 1982. などにおける市民的公共性の観点からのカンペへの関心を経て、フランス革命二百年にあたる一九八九年を境に、例えば Schmitt, H., Politische Reaktionen auf die Französische Revolution in der philanthropischen Erziehungsbewegung in Deutschland, in: hrsg. v. Herrmann, U., und Oelkers,

U., Französische Revoltion und Pädagogik der Moderne, Zeitschrift für Pädagogik, 24. Beiheft, Weinheim/Basel, 1989, SS.163-184. など、近代批判的視座からの関心はさらに強まった。わが国では、森川直「ドイツ啓蒙主義教育学再考―汎愛派のルソー受容をめぐって」『岡山大学教育学部研究紀要』第一〇四号所収、一九九七年、八三―九三頁)。また、カンペのSeele論を基軸として教育思想の体系性を再検討すると同時に、カンペの汎愛派における代表的性格をこの視点から明らかにするものとして、拙稿「J. H. Campe教育思想におけるSeelenlehreの位置と意味」、『日本の教育史学』第三八集所収、一九九五年、一二五〇―一二六八頁。

(2) Orgeldinger, S., Standarsierung und Purismus bei Joachim Heinrich Campe, Berlin/New York, 1999. これを踏まえたカンペ言語論における公共性の問題については、吉田耕太郎「十八世紀ドイツ語純化論の成立とその社会的意義：ヨアヒム・ハインリヒ・カンペを例として」、東京外国語大学海外事情研究所『クァドランテ』第七号所収、二〇〇五年、三八―二九二頁。

(3) Schiewe, J., Sprachpurismus und Emanzipation. Joachim Heinrich Campes Verdeutschungsprogramm als Voraussetzung für Gesellschaftsveränderungen, Hildesheim, 1988.

(4) Fertig, L., Campes politische Erziehung, Darmstadt, 1977.

(5) Kostler-Holste, S., Natürliche Sprechen im belehrenden Schreiben, Tübingen, 2004.

(6) Campe, J. H., Wörterbuch zur Erklarung und Verdeutschung der unserer Sprache auf gedrungenen fremden Ausdrücke, Bd.1., Braunschweig, 1801, S.16.

(7) Moritz, K.Ph., Deutsche Sprachlehre für die Damen. In Briefen, Berlin, 1782, S.162f.

(8) ウンベルト・エーコ『完全言語の探求』、上村忠男・廣石正和訳、平凡社、一九九五年、四一一頁。

(9) Bezold, R., Popularphilosophie und Erfahrungsseelenkunde im Werke von Karl Philipp Moritz, Würzburg, 1984, S.54.

(10) Moritz, Deutsche Sprachelehre für die Damen, S.97.

(11) Moritz, Götterlehre oder mythologische Dichtungen der Altern, in: Günther, H. (hrsg.), Karl Philipp Moritz: Werke in drei Bänden, Frankfurt a.M., 1981, S.7.

(12) Becker, J., »Trösterin Hoffnung«: Zu Moritz' Götterlehre, in: Fontius, M. u. Klingenberg, A. (hrsg.), Karl Philipp Moritz und das 18. Jahrhundert, Tübingen, 1995, S.238-247.

(13) Moritz, Anton Reiser. Ein psychologischer Roman, Bd.1.,

mit e. Nachw. von Rudolph, J., Berlin, 1952, S.254f.

(14) Moritz, Versuch einer kleinen praktischen Kinderlogik welches auch zum Theil für Lehrer und Denker geschrieben ist, Berlin, 1786, S.124f. Bezold, Popularphilosophie und Erfahrungsseelenkunde, S.64f.

(15) ジャン・パウル『美学入門』、古見日嘉訳、白水社、一九六五年、六〇頁。

(16) Dürbeck, G., Aporien der Erfahrungsseelenkunde, in: Fontius u. Klingenberg (hrsg.), Karl Philipp Moritz und das 18. Jahrhundert, S.227–235.

(17) Reiner, M. (hrsg.), Moritz contra Campe: ein Streit zwischen Autor und Verleger im Jahr 1789, Röhrig, 1993, Nachwort, S.73f.

(18) Moritz, Offener Brief, in: ebd., S.15.

(19) 伊藤利男『敬虔主義と自己証明の文学』、人文書院、一九九四年、四九一頁。

(20) Moritz, Anton Reiser, S.13. 伊藤前掲書、五〇〇頁。

(21) Reiner, Moritz contra Campe, Nachwort, S.78.

(22) Campe, Moritz. Ein abgenöthigster trauriger Beitrag zur Erfahrungsseelenkunde, in: ebd., S.19.

(23) Campe, Kleine Seelenlehre für Kinder, Braunschweig, 1780, S.74f.

(24) Campe, Moritz. Ein abgenöthigster trauriger Beitrag zur Erfahrungsseelenkunde, S.20.

(25) 伊藤前掲書、四九一頁。

(26) Campe, (Vorwort), in: Braunschweigisches Journal, Bd.8., 1789, Inhalt.

(27) Reiner, ebd., S.81.

(28) Campe, Briefe aus Paris, in: Brainschweigisches Journal, Bd.10., Braunschweig, 1789, S.227.

(29) Campe, Briefe aus Paris, Braunsweig, 1790, S.XIf.

(30) Campe, Proben einiger Versuche von deutscher Sprachbereicherung, in: Braunschweigisches Journal, Bd.1., S.259.

(31) 「外国語の万語からでっちあげられたまだらの外套」ebd. S.260.

(32) ebd. S.257f.

(33) ebd. S.262f.

(34) Schiewe, Sprachpurismus und Emanzipation, S.182f.

(35) Campe, Proben einiger Versuche von deutscher Sprachbereicherung, S.272.

(36) ebd., S.3.

(37) Campe, Zweiter Versuch deutscher Sprachbereicherungen oder neue Starkvermehrte, Braunschweig, 1792, S.IVf.

(38) Dobnig–Jülch, E., Die Revoltion im Wörterbuch, in:

Hüllen., W. (hrsg.), Understanding the Historiography of Linguistics, Münster, 1989, S.303f.

(39) Campe, Über die Reinigung und Bereicherung der Deutschen Sprache. Dritter Versuch welcher den von dem königl. Preuß. Gelehrtenverein zu Berlin ausgesetzten Preis erhalten hat, Braunschweig, 1794, S.16f.

(40) ebd., S.XXXIV.

(41) ヘルダー『言語起源論』、大阪大学ドイツ近代文学研究会訳、法政大学出版局、一九七二年、八一頁。

(42) Adelung, J. Ch., Über den deutschen Styl, 1785/1974 Rep., Hildesheim/New York.

(43) Campe, Über die Reinigung und Bereicherung, S.CCXV.

(44) Campe, Über die Reinigung und Bereicherung der Deutschen Sprache, S.CVIIf.

(45) Garve, Ch., Einige allgemeine Betrachtungen über Sprachverbesserung von C. Garve, Berlin, 1794.

(46) Campe, Über die Reinigung und Bereicherung, S.XXXXIIf.

(47) ebd., S.XXIII.

(48) Völkerschaft は外来語の Nation の訳語にそのまま充てられている。Campe, Wörterbuch, Bd.5., S.434.

(49) アイザイア・バーリン『ロマン主義講義』、田中治男訳、岩波書店、二〇〇〇年、五八頁。

(50) フリードリヒ・シュレーゲル「インド人の言語と英知について」、深見茂抄訳、『無限への憧憬　ドイツ・ロマン派の思想と芸術』所収、国書刊行会、一九八四年、二一八頁以下。

(51) Campe, Wöterbuch, Bd.6., S.313.

(52) 例えば Antiquiren (ebd., S.116.), Fantast (S.313.), Medium (S.416.) などにおけるルターからの引用。

(53) ジャン・パウル前掲書、三五二頁以下。

(54) 麻生建『ドイツ言語哲学の諸相』、東京大学出版会、一九八九年、三五頁。

(55) Grimm, J., Vorrede, in: Grimm, J. u. Grimm, W. (hrsg.), Deutsche Wörterbuch, Bd.1., Leipzig, 1854, Rep. 1984, S.XXIV.

(56) Wilhelm von Humboldt's gesammelte Werke, Reimer, G. (gedruckt u. verlegt), Bd.3., Berlin, 1843, S.252.

（広島大学）

The Romantic Transfiguration in the Enlightenmental Theory of Language in the Thought of Campe
— In Comparison to the Thought of Moritz —

Noritsugu Yamauchi
Hiroshima University
Lecturer

Purpose of this paper is to reexamine the positioning of the educational thought of Joachim Heinrich Campe which is a representative model of the educational thought in the Enlightenment, in comparison to the theory of Karl Philipp Moritz. Moritz as an early Romanticist tried in his language theory to establish a methodology for creating the universal language through self-analysis and on the basis of his own experiential psychology. Campe showed a necessity for stipulating concepts and an expectation for the public in his criticism of Moritz based upon Enlightenment psychology. This led him to the reconstruction of language through dictionary compilation in the occasion of the French Revolution. In that process Campe constructed a place for the Enlightenment theory of language, by describing the criticism of Moritz. Ironically, however, this turned out to give the latent character of Romanticism to the dictionary. On the basis of this transfiguration, various interpretations of the Campe's language theory were united in one dynamic image. Furthermore, a link between the Enlightment and Romanticism was established through the transfiguration of Campe's theory of language.